

インターナショナル・アカウンティングへの 再挑戦と国際会計研究学会の役割

平松 一夫
関西学院大学

要 旨

国際会計研究学会は1984年6月23日に72名の設立会員によって設立された。会員はその後大幅に増加している。設立総会では設立趣意書と学会会則が承認されるとともに、染谷恭次郎初代会長をはじめとする役員が選出された。第1回研究大会は1984年12月8日に早稲田大学において開催された。

国際会計研究学会は、国際会計の研究を推進することを目的としている。その目的を達成するため、毎年1回の大会、年報の発行、その他の活動が行われている。研究大会の統一論題テーマは、国際会計基準（国際財務報告基準）との調和化や統一などその時々 of 社会的な関心事も含めて選ばれてきた。また、国際交流については外国からの報告者の招聘、IAAER等海外の学会との連携など活発な展開が見られた。

今後、国際会計研究学会には、国際会計研究、国際会計教育、外国への情報発信、国際交流の強化など、さまざまな点で貢献が期待されている。

1. 国際会計研究学会の設立

(1) 設立総会

国際会計研究学会は、1984年6月23日、早稲田大学で開催された設立総会をもって設立された。その時の入会申込者は72名、設立総会への出席者は30名であった。2005年3月末現在の会員数は、個人会員が590名、賛助会員が7法人、名誉会員が14名であるから、設立当初に比べて大幅に増加していることがわかる。

設立総会では、設立趣意書と学会会則が承認され、年会費が定められるとともに、下記の役員が選出された。

〈初代役員〉	会長	染谷恭次郎	
	理事	会田義雄	新井清光
		宇南山英夫	江村 稔
		黒田全紀	増谷裕久
		松尾憲橘	溝口一雄
		森藤一男	
	監事	稲垣富士雄	川北 博
		西沢 脩	

(2) 理事会

続いて、第1回理事会が同年7月9日に東洋経済新報社で開催され、幹事2名が選任された。

〈初代幹事〉 片山 覚 平松一夫

また、予算案が承認され、年報について審議された。この時の新入会員は24名であり、総会員数が96名となった。

第2回の理事会は、同年12月7日に東洋経済新報社で開催された。この時に59名の個人会員が入会したのに加えて、賛助会員が5法人入会した。また、あわせて修正予算案が承認された。

第1回研究大会の時には12月8日に臨時

理事会も開催され、個人会員10名と賛助会員1法人の入会が承認された。これにより個人会員は165名、賛助会員は6法人となった。

(3) 第1回研究大会

こうして第1回研究大会が1984年12月8日、早稲田大学において開催されるに至った。準備委員長を務められたのは新井清光氏である。参加者は個人会員が99名、賛助会員が6法人であった。ちなみに、2005年度の第22回研究大会への参加者は200名を超えている。

2. 国際会計研究学会の役割

では、国際会計研究学会はどのような役割を果たしそうとしたのであろうか。

(1) 趣意書

国際会計研究学会の趣意書によれば、学会が目指したのは、第1に、国際会計の研究者が相互に研究連絡を行い、研究に必要な情報を交換する場をもつことである。第2は、大学等の研究者のほか、監査法人や企業で国際会計の業務に何らかのかたちで従事している研究者を含めた学術研究団体を設立することである。そして第3は、日本会計研究学会を母体として、専門をさらに細分化して学術研究団体を設立することである。

第3の点については、日本会計研究学会が広く会計学の全体をカバーするのに対して、国際会計研究学会については「国際」という冠があることから明らかなように、国際会計に特化しているわけである。そしてまた、国際的な交流をもこの学会が中心となって進展させていくということが意識されていたの

であり、染谷恭次郎初代会長もそのことをしばしば指摘されていた。

(2) 会 則

国際会計研究学会の目的を定めた会則第2条によれば、「本会は、国際会計の研究を推進することを目的とする」とされている。そして、その目的を達成するため、第3条で次の事業を行うこととしている。

1. 毎年1回の大会および必要に応じ部会における会員の研究発表ならびに討議
2. 国際会計研究学会年報その他国際会計の研究に関する刊行物の発行
3. その他本会の目的を達成するため適当と認められる事業

このうち、毎年1回の大会については実施されているが、必要に応じて部会における会員の研究発表ならびに討議を行うとされている部分については未だ実施されていない。設立後20年が経過した現在、部会等を開催し、研究活動をさらに活発にする必要があると思われる。事業の2つ目にあげられている国際会計研究学会年報は作成されているが、その他の国際会計の研究に関する刊行物は発行されていない。

このように、設立の時から意図されていたことのなかでなお実現していない課題がある。

(3) 研究の奨励

設立当初の計画の中にまだ実現できていないことがらがある一方で、研究を奨励するため実施された新たなことがらもあった。その一つが2002年から始まった学会賞の創設である。また、2004年には院生会員の制度が設けられた。院生の報告もしばしば見られるところである。

(4) 国際交流

国際交流についても活発な展開が見られた。

まず、第1に、外国からの報告者の招聘がある。これまでに学会として招聘したのは14名で、これらの方々についてはその後、名誉会員に推薦している。アメリカだけでなく、アジアその他の国の方々も名誉会員になっている。

第2に、海外研究報告等推進プロジェクトがある。これは英語で報告する会員のために英語の添削をいわゆるネイティブの方に依頼する仕組みで、その経費を支援するというものである。実際、英語による報告も近年増加してきている。

第3に、IAAER等海外の学会との連携がある。IAAERはInternational Association for Accounting Education and Research (国際会計教育研究学会)の略称であり、世界の会計学会の連合体である。日本の学会としては日本会計研究学会と国際会計研究学会が加盟している。その設立に日本が果たした役割は大きかった。染谷恭次郎氏、中島省吾氏、藤田幸男氏がIAAERの役員として貢献された。現在は平松一夫が副会長を務めている。なお、染谷恭次郎氏と中島省吾氏には、それぞれ1997年と2000年にFounders' Awardが贈られている。

第4に、学会の共催がある。2000年10月6日～7日に神戸で開催された第17回研究大会の時には、国際会計研究学会(当番校:関西学院大学)とIAAERが共催で国際学会として開催し、外国から100名近くの参加者があった。

第5に、国際交流事業への協力がある。2005年から日本会計研究学会が行っている韓国会計学会との交流に対しては、国際会計研究学会としても支援することになった。

3. 統一論題テーマの変遷

この間、統一論題のテーマはどのように変遷してきたのであろうか。それを一覧形式にまとめたのが、〈別添資料〉である。

第2回研究大会の統一論題テーマはアニュアル・レポートであった。当時、英文のアニュアル・レポートとしてどのようなものを作成して外国の投資家に提供すればいいのかが関心事となっていた。

その後の統一論題テーマとしては、国際会計基準 (IAS)・国際財務報告基準 (IFRS) との調和化・統一化に関心が寄せられてきたといえる。

調和化 (harmonization) は、現在では統一化 (convergence) として論じられている。統一化は、当初日本ではタブー視されていた。日本では最近まで、会計基準の違いがあっても調和化を認めるという方法が広く支持されてきたのである。しかし、環境変化に伴い、今日ではIASB (国際会計基準審議会) のもとで会計基準を国際的に統一することが話題になっている。しかし、各国・地域の会計基準におお差異がある中で、今後は、会計基準の統一を目指すだけでなく、相違を認めた上で国際会計基準との同等性をどう評価するかが問題になってくると考えられる。国際会計基準が統一論題でもしばしば取り上げられてきた背景には、そういった事情もある。

また、日本における会計研究ではアメリカやヨーロッパにおける会計の研究が主流であったが、国際会計研究学会ではアジアについても注目すべき研究が多く報告されてきており、アメリカ、ヨーロッパ、アジアという3極の研究が成されてきた。もちろんオーストラリアについての研究もある。

統一論題の他のテーマとして会計教育がある。当学会の主たる目的は国際会計の研究を推進することにあるが、会計教育がしばしば統一論題のテーマとして取り上げられてきた。その場合、会計教育一般を国際的に比較するという論点と、国際会計をどう教育するのかという論点を取り上げられてきた。

このように、統一論題のテーマは、概して言えば、その時々 of 社会的な関心事も含めて選ばれてきたといえるであろう。

4. 国際会計研究学会の展望

では、今後、国際会計研究学会はどのような方向性をもって運営されるべきであろうか。それについては少なくとも次の五つの点から考える必要がある。

- ① 国際会計研究
- ② 国際会計教育
- ③ 外国への情報発信
- ④ 国際交流の担い手
- ⑤ 上記についての学会としての取組

第1に、会則の目的にあるように、国際会計の研究をさらに促進することの重要性があげられる。今般、学会賞の審査にあたり、審査委員の他にテーマに即して適切な方から意見を聴取することが認められた。従来多かったいわゆる記述的な研究に加えて、最近は実証研究が多くなっている。学会が設立された20年前と比べると、研究内容だけでなく研究方法においても大きな変遷がある。それを踏まえて、学会賞の審査体制を整えることが決められたのである。こうした動きを含めて、当学会はさらに国際会計研究を促進する役割を担わなければならない。

第2に、国際会計の教育があげられる。会計をめぐる最近の国際動向を受けて、国際会

計基準ないしは国際財務報告基準について、さらにはより広範な国際会計をどのように教育していくかという大きな課題がある。

第3に、外国への情報発信がある。これはわが国として非常に重要な課題であると考えられる。外国向けには日本語で情報を発信してもあまり意味がない。外国の会議での発表を含めて英語で学会発表をすることや、論文を執筆すること、あるいは、著書を出版するといったことが、会計における日本の国際貢献として求められている。

第4に、国際交流の担い手としての役割がある。これからの時代には、国内で活動することももちろん大切であるが、海外との国際交流も大切になる。その場合、出かけていくとともに外国の研究者を受け入れることが求められてくる。

第5に、上記のさまざまなことからについ

て学会として組織的に取り組むことの重要性が指摘される。研究、教育、情報発信、国際交流とってことからは、個人レベルでも行われるが、学会としてどう組織的に取り組むかが問われている。例として、国際交流について見てみよう。先にも触れたが、2005年から日本会計研究学会と韓国会計研究学会の交流が始まる。この取り組みに対して国際会計研究学会としてもそれを支援することとされた。これは、個人だけではなくて、学会そのものが国際交流の担い手になる意志を示した好例であるといえる。また、国際学会の開催があげられる。学会の組織的な貢献として、今後、わが国が不得手とする国際会議の開催という大事業にどのように取り組むかを、そろそろ学会としても検討すべきではないかと考える。

国際会計研究学会統一論題等一覧

回数	開催期間 開催校	論題名	報告者
1	1984 年度 (1984.12.8) 早稲田大学	統一論題：国際会計の発展と現状 国際会計会議の系譜・序説 ー世界の会計思潮 80 年の流れー 国際財務報告とアニュアル・リポート 企業会計の継受ー日韓比較ー EC 第 4 号指令の各加盟国の立法過程に及ぼす影響 EC における会計調和化の方向と問題点 ー第 4 号理事会指令を中心にしてー フランスにおける国際会計の発展と現状	司 会：松尾 憲橘 報 告 者：中地 宏 平松 一夫 大雄 令純 司 会：溝口 一雄 報 告 者：戸田 秀雄 森川八洲男 野村健太郎
2	1985 年度 (1985.11.8-9) 関西学院大学	統一論題：財務報告の国際化 ーわが国企業の海外向けアニュアル・リポートを中心とし てー 国際会計へのアプローチ ー日立の Annual Report を中心にー 国際会計基準 (IAS) を採用した海外向けの財務諸表について ー佐世保重工業 (株) の事例研究ー わが国企業の海外向けアニュアル・リポートの実態 財務報告の国際化 ーCharge and Discharge Accounting を基点としてー	座 長：江村 稔 報 告 者：森田 皓 稲見 熹男 辰巳 正三 末川 義郎 稲垣富士男
3	1986 年度 (1986.11.7-8) 慶應義塾大学	統一論題：多国籍企業の会計諸問題 外貨換算と税効果会計 多国籍企業の会計基準 多国籍企業と連結会計 多国籍企業の行動様式と会計の役割	座 長：宇南山英夫 講 演 者：対馬 和也 森川八洲男 野村健太郎 兼子 春三
4	1987 年度 (1987.10.24-25) 横浜市立大学	統一論題第 1 部：財務会計情報の国際化 企業の海外資金調達のための財務会計情報 財務データベースの国際比較 ー日経 NEEDS を中心としてー 統一論題第 2 部：管理会計情報の国際化 多国籍企業の業績評価に関する一考察 国際企業の経営政策への管理会計的アプローチ	座 長：増谷 裕久 報 告 者：吉野 賢治 大矢知浩司 薄井 彰 座 長：小川 洵 宮本 寛爾 吉田 彰
5	1988 年度 (1988.10.21-22) 広島修道大学	統一論題：EC 会計の現状と展望 フランスにおける EC 理事会指令の国内法化の現状と展望 ーとくに連結決算書に関するプラン・コンタブル・ジェ ネラルの規定を中心としてー イギリス会計制度の現状と展望 ーコモン・ローと大陸法の融合ー オランダ会計制度の現状と展望 西ドイツにおける商法計算規定の検討	座 長：黒田 全紀 報 告 者：伊豫田隆俊 田中 弘 上妻 義直 興津 裕康

回数	開催期間 開催校	論題名	報告者
6	1989 年度 (1989.10.21-22) 南山大学	統一論題：会計と環境 国際環境とわが国会計制度 会計と政治的環境 会計と環境 激動する国際会計事務所 ―その集合離散―	モデレーター：大雄 令純 報告者：菊谷 正人 権 泰殷 野村健太郎 川北 博
7	1990 年度 (1990.6.16-17) 専修大学	統一論題：各国の会計教育の現状と問題点 ドイツにおける会計教育の現状と問題点 アメリカの会計教育の現状と問題点 中国の会計教育について	司 会：藤田 幸男 報告者：瓶子 長幸 中地 宏 高橋 巖
8	1991 年度 (1991.6.15-16) 関西大学	統一論題：会計基準設定の国際的調和とその問題 EC 統合における会計原則の調和化について ―英国における影響― ドイツ商法会計制度・企業情報開示にみる国際的調和化の 傾向とその問題 会計基準の国際的調和 ―アメリカの GAAP と国際会計基準の比較を中心として―	座 長：森川八洲男 司 会：河合 秀敏 報告者：藤田 滋 郡司 健 林 裕二
9	1992 年度 (1992.6.20-21) 國學院大学	公開シンポジウム：国際会計基準の形成とその問題	司 会：白鳥庄之助 講演者：Sidney J. Gray パネラー：津守 常弘 平松 一夫 藤田 幸男 コメンテーター：小野 行雄 山田 辰己
10	1993 年度 (1993.7.3-4) 早稲田大学	公開シンポジウム：会計基準の国際化と日米間協力	司 会：稲垣富士男 講演者： Dennis R. Beresford パネラー：広瀬 義州 北村 敬子 村山徳五郎 コメンテーター：徳賀 芳弘 濱本 道正
11	1994 年度 (1994.9.23-24) 関西学院大学	統一論題：国際会計の教育・研修 日本における国際会計教育の現状―講義担当教官の経験 国際会計教育の課題 現地経理幹部の育成について 会計・監査実務化のための国際会計の教育の研修について ―監査法人における現状とこれから―	座 長：小澤 康人 報告者：松本康一郎 菊谷 正人 笠井 操 中地 宏

回数	開催期間 開催校	論題名	報告者
12	1995 年度 (1995.9.30-10.1) 東洋大学	統一論題：国際会計基準の現状と課題 国際会計基準の現状と課題 —フランスを中心として— 国際会計基準への対応 —大陸型会計の視点から— 国際会計基準と中国企業会計制度 国際会計基準の展開	コーディネーター：平松 一夫 報告者：野村健太郎 森川八洲男 水野 一郎 長谷川哲嘉 コメンテーター：川北 博 菊谷 正人
13	1996 年度 (1996.11.29-12.1) 東亜大学	統一論題：国際的視点から見た企業会計原則の見直し 企業会計原則の見直し 国際的視野から見た日本の企業会計の特徴と「企業会計原則」 会計基準の国際的調和とわが国企業会計原則 「企業会計原則」の見直しに伴う課題	コーディネーター：平松 一夫 報告者：寺坪 修 徳賀 芳弘 北村 敬子 広瀬 義州 コメンテーター：松井 泰則 野村健太郎
14	1997 年度 (1997.11.29) 青山学院大学	統一論題：グローバル化と連結会計 連結会計における税効果会計問題 企業結合会計における公正価値 連結財務諸表をめぐるイメージの錯綜と連結会計基準の 再検討 経営環境のグローバル化と連結会計 —展望と課題—	司 会：興津 裕康 報告者：齋藤 真哉 佐藤 信彦 高須 教夫 古賀 智敏
15	1998 年度 (1998.11.7) 京都産業大学	統一論題：世界の会計の現状 —国際会計基準との関連で— Recent Accounting Reform in Korea ドイツにおける会計基準 —国際化対応とその現状— Current Financial Accounting Development in Indonesia: Some Experiences in Adopting the International Accounting Standards 日本の会計の現状 —国際会計基準との関連で—	司 会：白鳥庄之助 報告者：朱 仁基 郡司 健 Hadori Yunus 広瀬 義州
16	1999 年度 (1999.7.15-16) 北海道大学	パネルディスカッション： 21 世紀における国際会計研究のフロンティア	コーディネーター：平松 一夫 パネリスト：岡田 依里 田中 弘 徳賀 芳弘

回数	開催期間 開催校	論題名	報告者
17	2000 年度 (2000.10.6-7) 関西学院大学	統一論題Ⅰ：国際会計基準 Global Accounting Standards and the new IASC Accounting Reform in Korea Millennium Crossroads for Accounting “Recent Developments in the Japanese Profession” and “A Harmonised Profession - Forcing the Pace” 統一論題Ⅱ：会計教育 The Role of Academics in Meeting The Challenges of Educating Professional Accountants in the 21st Century Issues in Korean Accounting Education Accounting Education: Are We at the End of the Road?	司 会：Sidney J. Gray 報 告 者： Byran Carsberg Il-Sup Kim Gerhard G. Mueller 藤沼 亜起 司 会：Gary L. Sundem Belverd E. Needles, Jr. In Ki Joo Michael Diamond
18	2001 年度 (2001.8.27-28) 小樽商科大学	統一論題：国際会計基準に対するわが国の対応 —制度的・実務的見地から— 国際会計基準と国際教育基準 わが国会計基準の IAS に対する貢献可能性 会計基準の国際的調和化か、全世界統一か	司 会：武田 安弘 報 告 者：平松 一夫 長谷川哲嘉 加藤 厚
19	2002 年 (2002.8.29-30) 中部大学	国際シンポジウム：異なる社会的、文化のおよび 経済的環境における会計の役割 Accounting Development and the Nexus of Domestic- Global Interests in Developing Countries Accounting Standard Setting and Corporate Govern- ance in Malaysia Perspectives on CPA’s Liability and CPA Law Revision An International Comparison of the Roles of the Corporate Audit Committees in Korea, Japan and the United States	コーディネーター：林 慶雲 モデレーター：平松 一夫 報 告 者： Shahrokh M. Saudagaran & Joselito Diga Mustafa Mohd Hanefah Ruoshan Li Chungwoo Suh & Yong-Min Kim
20	2003 年度 (2003.8.27-28) 立教大学	統一論題：国際会計基準の動向とわが国会計開示の 現状と課題 会計技術移転論からみた国際会計基準への統一化 会計基準の国際的類型 会計基準の国際的収斂をめぐる諸課題 IASB の最近の活動状況について	座 長：徳賀 芳弘 報 告 者：小津稚加子 須田 一幸 大日方 隆 山田 辰巳 コメンテーター：川村 義則 齋藤 真哉
21	2004 年度 (2004.12.11-12) 関西大学	統一論題：会計基準の世界統一と日本の選択 会計基準をめぐる相互承認と世界統一の関係 コンバージェンスへ向けた IASB の動きについて 会計基準の統一と財務情報の透明性 会計基準統合化の目標、現状、展望	座 長：伊藤 邦雄 報 告 者：平松 一夫 山田 辰巳 奥山 章雄 齋藤 静樹